

SY3-1

福岡市立こども病院循環器センターにおける成人移行支援の現状

兒玉 祥彦、倉岡 彩子、石川 友一、中村 真、佐川 浩一、石川 司朗

地方独立行政法人 福岡市立病院機構 福岡市立こども病院 循環器科

近年、先天性心疾患患者の治療成績は著しく改善した。その結果、従来は小児科領域の疾患とみなされてきた先天性心疾患患者の成人到達例が増加しており、現在、先進国では先天性心疾患患者の半数以上は成人患者である。これらの患者の診療を、誰が担うかというのは、先天性心疾患診療をとりまく大きな課題の一つである。福岡市立こども病院は1980年の開院以来1万例を超える先天性心疾患手術を経験してきており、多くの患者が成人期に到達している。成人先天性心疾患（ACHD）の診療には、心疾患そのものの診療に加え、生活習慣病や妊娠・出産など成人特有の問題を伴う可能性があり、我々は、診療主体として小児科医よりも循環器内科医が望ましいと考えている。当院では15歳から18歳を移行期と位置付け、小児科から他院循環器内科への転科を行ってきた。しかし、この時期の患者の多くは精神的に保護者に依存しており、自分の病名が分からない、医師に症状を伝えられないといった患者としての未熟性を持つ。これらの患者のスムーズな成人期医療への移行支援として、当院では医師、看護師をはじめとした多職種による患者教育を行っており、成人科移行前に患者教育セッションを少なくとも1回、理想的には2回以上実施することとしている。また、成人科移行に伴うフォローアップデータ喪失もまた、小児期管理病院にとっては管理施設移行をさまたげる要因の一つである。当院で治療した患者の遠隔期成績が、現在の小児期治療にフィードバックされることが理想だからである。当院では、継続的なデータ蓄積を可能にするため、重症症例に関するACHDのカウンターパートである九州大学循環器内科と共同利用できるデータベースを作成し、診療および研究に活用することを推進している。